

氏 名	石田 克成
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲第409号
学位授与年月日	平成25年9月30日
審 査 委 員	主査 教授 宮崎 康二
	副査 教授 丸山理留敬
	副査 教授 椎名 浩昭

論文審査の結果の要旨

近年若年層で罹患率が急増している子宮頸癌は、無症状時から細胞診による子宮頸がん検診を受け、早期発見する事が重要である。子宮頸がん検診に用いられる細胞診分類には、最近ベセスダ分類が採用されたが、本分類の症例管理法や進展予測には不明の点が多い。サイクリン依存性キナーゼ阻害タンパク質である p16 と p21 は、子宮頸部扁平上皮内病変の進展に密接に関与している。本研究では、倫理委員会承認のもとで、患者 149 症例の横断的検討と、細胞診で異常なしか軽微な異常症例のうちで追跡調査ができた 61 症例（213 検体）の縦断的検討を、免疫染色（p16, p21）、human papillomavirus (HPV) genotyping、high risk HPV-in situ hybridization を用いて行った。その結果、①横断的研究では、p16, p21 免疫染色により細胞診で扁平上皮内病変を診断する際に有用な補助的情報を得られることが明らかとなった。特に p16 は初期病変、p21 はより進行病変の鑑別に有用であり、HPV 検査と組み合わせても有用性は失われなかった。②縦断的検討では、HPV 感染の有無、細胞診による形態学的診断が独立した扁平上皮内病変の進展予測因子となったが、p16、p21 免疫染色は有用な傾向はあったが統計的有意とはならなかった。以上の成績は、子宮頸がん検診において低コストで簡易な免疫染色が症例管理のための補助的情報として有用である可能性を明らかにしたもので、臨床的に有用な新知見であり学位授与に値すると判断した。